

TRY AND ERROR

～失敗は失敗じゃない～

B班 尾地・関山・小平・福田

はじめに

「宣伝会議」という宣伝・広告・環境に関する雑誌に掲載されていた**薬用養命酒製造株式会社**の**美酔う女子部**という20代女性向けのサイト紹介を拝読しました。それまで高齢者の方が飲むというイメージが強かった養命酒のイメージが覆り、このような企画を行った方にお話しを伺いたいと思い **薬用養命酒製造株式会社** **マーケティング部**の**南澤里枝さん** にインタビューをお願いしました。そして、私たちの今後の学生生活をどのように過ごしていくか考えました。

プロフィール

南澤里枝さん

- ・埼玉県立浦和第一女子高等学校 卒業
- ・東京農工大学農学部 卒業
- ・薬用養命酒製造株式会社入社
- ・マーケティング部 広告宣伝グループ 所属

インタビュー内容

南澤さんのお仕事内容

南澤さんは薬酒作りではなく主に広告のお仕事をされています。TV コマーシャルの作成やCMをどの番組の枠で放映するか決定、ラジオCMや雑誌や新聞の広告の制作にも携わっています。

商品の広告の制作意外にもFacebookなどのSNSを通じて養命酒製造の現在の取り組みや会社からのメッセージや在存意義を伝え、世間の人々にもっと養命酒製造の良さについて知ってもらおう。お客様と商品の売買を行うだけの関係ではなく、企業そのものへの信頼を深め確かな関係性を築いていくための会社の広報としてのお仕事もされています。

会社に入社した理由

大学入学時には既に食品関連のメーカーに勤めたいと考えていたそうです。また、農学部に進学したのは南澤さんご自身が食べるのが好きだった事と、**食が満たされる事は人が幸せになるベースになっている**と思った事からで、就職もこれを実現できる食品メーカーに入社したいと思ったことがきっかけだったそうです。

理系学部を卒業すると、入社しても開発室や食品管理室に入り一人で黙々と研究をする人が多いなか、南澤さんは**人と協力をしてなにか新しいものを作りたい**という思いからマーケティング部への配属を希望されたそうです。

二十歳のころ

南澤さんはアルバイトや学園祭実行委員会の運営、自分でお金を貯めて初めて一人で海外旅行に行くなど様々な事を二十歳のころに経験したそうです。

南澤さんは学生時代に「飲むお酢」の専門店の販売のアルバイトを一番長く続けていたそうです。南澤さんは飲むお酢への憧れ・お酢が飲める女性への憧れからアルバイトに応募し、採用され働くことになりました。アルバイト先のお店はオープンしたばかりのため、きちんとしたマニュアルやシステムがなく、最初はどのように接客をしたらいいか分からなかったそうです。しかし、スタッフの方は皆お店を良くしようという思いの強い方が多く「こうしたら効率が良くなる。」「こうしたらお客さんに早く商品を提供できる。」といった会話が自然と生まれ、「このような状態の時はこうしていこう」など自分たちでお店の回し方を考案していったそうです。南澤さんは『マーケティングのことを全く知らない時期だったが、**自分たちの手でマニュアルのようなものを作り上げ、お店を運営していくことに充実感を感じていた**』と、おっしゃっていました。

学園祭実行委員会では、ステージ企画を担当するステージパートで仕事をされました。二年目にはステージパートを取りまとめるサブチーフに就任し、自分で企画書を書き、他のパートの人に見てもらい互いに厳しく意見を言い合い、案ブラッシュアップさせていく「叩き」という会議を行っていたそうです。このような経験から学園祭実行委員会では学園祭を成功させるという共通の目標にむけて、**仲間と本気で意見を交わしあうことの大切さを学んだ**そうです。

失敗したと思うこと

やりたいと思って興味があるにもかかわらず、その場所に一人で行くのをためらい、ストップをかけてしまったことがあったそうです。

「若いうちにやることはその時は失敗だと感じて、後で振り返った時には失敗とは思わない。失敗したらどうしようとか考えずに、挑戦し、ダメだったらダメで、あきらめてもっといろいろなことに挑戦すべき。」と、おっしゃっていました。

20歳の頃の夢や目標

南澤さんは「一からお店を自分たちの手で作り上げていって、それがお客様にも認められる時が非常に嬉しかった」とおっしゃっていました。そこで、お客様を一番身近に感じる事の出来る広告の仕事に就きたいという思いが20歳の頃に具体的に変わったそうです。

仕事に対する姿勢

お話を伺い、南澤さんは自分の考えをしっかりと持っていて芯のある方だと感じました。しかし、そんな南澤さんでもネガティブになることはあるそうです。「自分のしていることが本当に正しいのかわからなくなる時があります。でも不安に思うことは避けられないので徹底的に考えて案を詰めていきます。こんなことをしたいという情熱も必要だけれど、自分がやろうとしていることを客観的に見る目、冷静な判断力も必要です。これは広告の仕事に携わるようになって **TRY AND ERROR** を経験してきた今だからこそわかることです。」と仰っていました。

仕事の企画を考えるときは、休日や食事中でも常に考えているのだそうです。意図的に ON と OFF を切り替えるために趣味に没頭するとき、切り替えなくてもいいと割り切るとき、仕事によって臨機応変に対応することが大切なのだとお話を伺い感じました。

「どんな仕事にも自分のアイデンティティーを乗せないと面白くならないです。社会人になると一日の大半を会社で過ごすことになるので、仕事も楽しまないと損だと思えます。そうして一生懸命仕事をすることで自分にしかできないものが出来上がっていきます。私は一生懸命仕事をすることで得られることがたくさんあるので、**仕事＝生きる意味**に近いです。」と仰ってました。

私達へのアドバイス

「学生のうちは色々なことに挑戦すべきです。全力でやった人ほど得られるものは多いし、何をやっても必ず得るものがあるはず。何かに挑戦するということは大変な事ですが、その大変さを含めて楽しんでください。熱中できる何かを見つけることが出来ればきっと楽しくなります。」と仰っていました。

また、「資格や語学など持っているだけでなく、使えるものとして身に付けておくべきです。自分が持っているものを仕事やコミュニケーションにどう活かしていくかが重要になると思います。」とも仰っていました。

おわりに

南澤さんは学生時代『自分はこういう人間だ。だからこういう事はしない、こういう事はできない』と決め込まずに様々なことに挑戦していたそうです。また、「幼稚園は授業がなく、高校も自分たちで授業の編成を行う学校に在学していたので、何かしたいと思った時には自分のやりたいことをどのようにして実現させるかを考え、行動に移さなければ何も起こらない環境にあったからこそ 0 からものを作り出す力が身に付き、今に繋がっているのだと思います。」と仰っていました。

二十歳のころを振り返って

この「二十歳のころ」を通して、何事も失敗を恐れず挑戦する大切さを学びました。南澤さんのお話を伺ってこれからは自分から積極的に行動し、後悔することの無いように学生生活を送りたいです。「二十歳のころ」を完成させるまでに他人に分かりやすく伝える事の難しさや仲間と協力することの重要性を感じました。

尾地 私は 20 歳の頃を経て、挑戦することの大切さを学んだ。失敗を恐れずにいろいろなことにトライしていきたいと思う。

具体的には情報収集を学生時代に取り組みたいと考えている。

今は知識が少ないために、行動や思考の幅が狭い。好きなことだけでなく、苦手なものや、今まで興味を持っていなかったものに積極的にアンテナを張り、挑戦していきたいと思った。

小平 南澤さんからのアドバイスは 何事も恐れずに挑戦すべき ということだ。私はアルバイトで時間帯責任者になるのがいるが、ミスをして上司から怒られる事を極端に恐れ自分から積極的にやりたいと申し出ることがない。しかし、南澤さんにお会いしお話をお伺いして、そのミスは失敗ではなく経験として吸収し次回に活かせばいいのだと考えられるようになった。次回からは自分から責任者をやりたいと進んで申し出てみようと思う。

そして、失敗に失敗なんてない事を自分自身が身を持って体験し、後輩に自信をもってたくさん失敗していい ということを伝えていきたい。

関山 アポの取り方、メールの作り方、パワーポイントの作り方全てが初めての経験でした。最初はどうしたらいいか分からず大変だったけれど二十歳のころを終えてこの企画を通して得られるものがたくさんあることに気づきました。これからは二十歳のころで学んだことを今後の自分の学生生活に活かしていきたいです。

福田 今回の二十歳のころでは反省点や失敗だった点が多々ありました。発表を終えてからあの部分を変えたらもっと上手く出来たのではないかなど後悔する所もありました。これからのゼミの活動で発表する機会は沢山あると思います。その時に二十歳のころでの反省点や失敗点を活かせるようにしたいと考えています。

また、インタビューで一番印象に残った事は「南澤さんは失敗に失敗なんてないから！」とおっしゃっていたことでした。セオドア・ルーズベルトの名言にこのような言葉があります。『最善の策は正しいことを選ぶこと。次善の策は間違ったことを選ぶこと。最悪の策は何もしないこと。』私は失敗する＝恥ずかしいことという印象を強く持っていて、失敗を恐れるがゆえに行動を起こさずにいました。何もしないことは成功へのチャンスを自ら無くしているということにハッとさせられました。失敗できるうちに沢山の失敗を重ね、失敗でも少しずつ成功に近づけるような失敗をしたいと思いました。

このような登竜門企画を用意して下さった加藤恭子ゼミの方々に感謝させて頂くと同時に、お忙しい中私どものインタビューを快く承諾して下さいました南澤里枝さんに改めて深く御礼申し上げます。